

説話文学会四月例会

シンポジウム「寺院における学問と唱導—天野山金剛寺聖教を起点として」

趣意文

近年、各地の寺院聖教調査が進展し、学僧の活動実態や寺院間のネットワークが注目されている。大阪府河内長野市の真言宗の古刹天野山金剛寺もその一つであり、中世初期の一切経をはじめ、九七〇〇点に及ぶ聖教が蔵されている。その中には、『注好選』『三宝感応要略録』などの稀少な説話資料も含まれており、更に、近時、『天野山金剛寺善本叢刊』（後藤昭雄監修、勉誠出版、二〇一七年、二〇一八年）においても説話文学に関わる複数の資料が紹介された。本シンポジウムでは、後藤昭雄氏を中心とするグループで金剛寺聖教調査に携わってきたメンバーのうち三名が、中世初期の金剛寺聖教を起点として、寺院の書物の作成と利用を検討する。特に、要文集や経釈など、説話や願文等の文学との関わりが深い書物を検討し、唱導を豊かなものにする語句や説話が集積・創造されていく様子を具体的に捉えたい。

発表者のうち、仁木氏は、表白・願文等から対句を中心に抜き出して類聚した要句集『明句肝要』（金剛寺蔵・鎌倉初期写）の性格、文学史上の位置づけを通して、寺院における漢学の環境を検討する。中川氏は、金剛寺僧源円による宝治元年（一二四七年）の書写奥書を有する『無名仏教摘句抄』について、典拠となった僧伝等の資料を検討することにより、願文作成の方法を考察する。箕浦は、元暦元年（一一八四年）に金剛寺で書写された法華経釈『能生諸仏経釈』に見られる仏教説話、世俗の事柄を用いた例証等の検討を通じて、経釈の方法を検討する。

金剛寺聖教の検討を起点として、広く中世初期の寺院の学問・唱導・説話を考察するシンポジウムとしたい。

「金剛寺蔵『明句肝要』の典拠とその利用」

仁木夏実（明石工業高等専門学校）

本発表では、金剛寺聖教の一つ『明句肝要』の性格とそこから導き出される文学史上の位置づけを通して、寺院における漢学の環境について検討する。

近年天野山金剛寺に見出された『明句肝要』（『天野山金剛寺善本叢刊 第一期第一巻 漢学』所収）は、仏書や願文、表白などから明句（名句、優れた句）を抜き出し、「生死無常」や「逝去二親」「法会莊嚴」といった内容に従って類聚した書物である。奥書等はなく、編纂や書写に関する情報には乏しいが、文字や紙の状態から書写は鎌倉時代初期と見られ、真言宗寺院における唱導資料として注目される。

本文における最も大きな特色は引用句の多くが対句であり、以下の例のように、対句が平行に配置されているということである。

八 逝去父母

我生者父也 養育之恩蘇迷還短

白言

生我者母也 覆護之德溟渝尚淺

また、冒頭の「生死無常」は『往生要集』からの引用が中心となっているが、原文そのままではなく、抄出して対句に仕立て直している箇所もある。こうした処置は、書写者の関心、そして本書の目的が構造を明らかにした上で巧みな対句の例を提示することにあつたということをも物語っている。

このような対句構造を意識した唱導資料には叡山文庫本『類句抄』や真福寺蔵『肝心集』がある。それらとの比較も行いつつ、本書が典拠をどのようなものに求め、さらにそれらをどのように利用しているのか、実態を明らかとしたい。その作業は『文集抄』や『楽府注少々』、『本朝文粹』巻八・十

といった漢詩文資料を豊富に含む金剛寺聖教全体の考察、また当時の寺院における漢学環境の解明に資するものとなるはずである。

「中世金剛寺僧が書写した摘句集——金剛寺蔵〈無名仏教摘句抄〉の性格」

中川真弓（日本学術振興会特別研究員）

天野山金剛寺に所蔵される〈無名仏教摘句抄〉（『天野山金剛寺善本叢刊 第一期第二巻 因縁・教化』所収）は、經典や願文・表白、伝や讃など、仏教関係の要句を類聚した摘句集である。

書写奥書には「宝治元年五月二十八日書之戌時許（花押）」とあり、表紙右袖にある署名「源円」と同筆と認められることから、本書が「源円」という人物によって宝治元年（一二四七）五月に書写されたことが知られる。金剛寺一切経にはこの「源円」と同一人物によって書写されたと見られる經典が存在しており、その奥書内容から「源円」が金剛寺の人物であったことが確定できる。金剛寺に所蔵された経緯が知られる資料は、經典以外では少なく、本書はその点からも注目されよう。

表紙見返しには「讃仏 寺塔 法門 菩薩 僧 神分 靈分」と記されており、本文の内容を示した標目となっている。仏教詩文制作のための摘句集・例文集という性格をもつ本書は、冒頭の標目にしたいがい、七部に分けて構成されている。摘句については、経文のほか様々な種類の漢詩文からの抜萃が確認できるが、そのほとんどが出典を示していない。

注記により出典が知られるものの中には、先学によって明らかにされた平安朝漢文学と関わる佚文も含まれている。僧部末尾に見える「十六羅漢讃」の一群などは羅漢をめぐる信仰、また神分部・靈分部の摘句などは法会の次第とも関連させて考える必要がある。本資料は、金剛寺での仏教漢文表現の享受に関わる興味深い問題を提起している。本発表では、これらの観点以外からも、広く他の願文・唱導関係資料と比較検討することにより、本書の性格の検討とその位置づけをおこないたい。

「金剛寺蔵『能生諸仏経釈』に見る平安後期の法華経講説」

箕浦尚美（同朋大学）

天野山金剛寺蔵『能生諸仏経釈』（『天野山金剛寺善本叢刊 第二期第四巻 要文・経釈』所収）は、法華経の薬草喻品第五から見宝塔品第十一までを順に注釈した書物である（「能生諸仏経」は法華経の意）。奥書に「元暦元年（一一八四）七月十日 金剛寺書了」とあるが、これは金剛寺聖教のうち、書写が金剛寺で行われたことを示す最も古い年次である。

行基の開基と伝えられる金剛寺は、高野山の阿観の入山（一一七一年）によって再興されるが、金剛寺所蔵の平安期の聖教には、承安四年（一一七四）書写『法華文句』巻四などの天台三大部とその注釈をはじめ、天台文献が多くある。これらの多くは書写の後に移入されたものと考えられるが、『能生諸仏経釈』は、智顛『妙法蓮華経文句』等天台系の書物が多く用いられながら、法相宗の窺基『妙法蓮華経玄賛』の引用もあり、天台宗と法相宗の教学内容を持つ法華経釈である。一方、金剛寺では、養和元年（一一八一）には、真言寺院として伝法会が始まり、法華経も講ぜられている。原本の成立時期は不明であるが、本書がそのような時期に金剛寺で書写された法華経釈であることは、その学問や蔵書形成を考えるための重要な手がかりになるものと思われる。

近年研究が進められてきた平安期の法華経品釈に、澄憲『法華経品釈』（金沢文庫蔵・真福寺蔵）や石山寺蔵『法華経品釈』などがあるが、本書の特徴としては、「来意等略不書」（五百弟子授記品、授学無学人記品）などとして、大きく省略している部分がある一方、因縁譚等の記された入文判釈（各句の注釈）を比較的長く残していることが挙げられる。また、「化城」「如来堂」「出大音声」などの注釈では、仏典から離れて、寺院名や世俗の事物を物尽くしのように列挙するという形をとっていることも特徴と言えよう。白居易や都良香の句のほか、出典未詳の対句的修辭を持つ漢詩句も引用されている。発表では他の法華経釈と比較しつつ内容を検討し、経釈を彩る説話や修辭について考えたい。